

僕の名前は忌部和守。いんべかずもりこれから話すことは僕が体験し

た不思議な話だ。

今、振り返るとあの人たちに出会うことは運命だったのかもしれない。少なくともあれ以来僕の人生は大きく変わった……。

あれは僕が高校生の頃だった。その時の僕にはクラスの中で好きな若守恵わかもりえという子がいた。けれども、その時の自分は今思うと、どこか臆病で踏み切れないところがあった。そんな風だったからか、その子に告白するチャンスは何回もあったはずなのにあつという間に時間過ぎていき、気づけば後数週間で卒業という時期になってしまった。

そんな時にクラスの中で変なうわさが広がっていた。なんでも「わすれ屋」という店があるらしく、そこに行

けば自分が忘れたと思う記憶を一つ忘れさせてくれるらしい。しかし、そこに行くためには条件があるらしく、人のうわさにだけでできて、そのうわさを聞いた人じゃないとダメ、場所がわからない、その店主が気に入る人じゃないとダメだとかいうものだった。

そんな話を聞きながら、僕は「もし、そんな店が本当にあつたら、この恋する気持ちを消してもらったら楽になるのかなあ。まあ、けど所詮うわさだしなあ」と思っていた。

そんな話を聞いた日の放課後だった。いつも通っている帰り道を通って帰ろうとしたが、その日は様子が違っていた。いつもは素通りする空き地に和風建築の建物が建っていたのだ！ 僕は驚きを隠せなかった。昨日までは何もなかったはずの空き地にぼつんと見たことがな

い建物が建っていたのだから……。その時の僕は少し疑念を浮かべながらもその建物の扉を開いた。

その扉の奥に広がっていたのは、まるで昔の様々な時代の文化がごちゃまぜになって、配置されているような部屋だった。照明がLED電灯ではなく、ろうそくだし、目に入る台所では、炊飯器がなく、代わりにかまどが置いてあると思えば、しまいはバイクや特攻服まで置いてあった。さらにおそらく実際に使われたであろう様々な種類の刀や甲冑まで置いてあった。そして、二階には歌舞伎の芝居小屋に置いてあるのぼり旗まで置いてあった。

そんな光景を見て混乱している時、唐突に後ろから何か重いものが落ちてきたような音が聞こえてきた。乱暴なその音が聞こえてきたと思ったら僕の目の前にさっ

き見た置物に負けず劣らずの凄い恰好をしている男が立っていた。その人は、上半身にはんてんを着、下半身にはふんどしをつけており、髪型はリーゼントという何だか何時代の人か分からなくなるほど、すごい恰好をしていた。

その人は、僕を見つめながら一言「ガキ、なんでお前がここに来れるんだ？」と呟いた。そんなことを言われた僕はいいよ脳の混乱が頂点に達して気を失った。

次に目を覚ました時に見たのはさっきの人が僕に対して睨みつけている光景だった。僕は思わず飛び起きて、その人に対して叫んでしまった。

「何なんですかあなたは！　そしてこの建物は何ですか！」

そんな言葉を投げかけた僕に対して、正体不明の男は

ぶつきらぼうに呟いた。

おもわすれたろう

「何っておれっちの名前は思忘太郎。そして、ここは

客が忘れたと思う記憶を忘れさせられる“わすれ屋

”だよ。あれっ、何かうわさでおれっちのこと聞いたことない？」

それが“わすれ屋”の店主と名乗る思忘太郎との初対面だった……。

そんなことを当たり前のように言っている思忘と名乗る男を見て、僕はもう一度混乱した。

頭の中でどうにか理解しようとする中で先ほどの男とは違う「がははははは、やつぱりおもしれえ坊主だな」という粗暴な声がどこから聞こえてきた。しかし、どこをどう見てもこの部屋の中には二人しかおらず、わけが分からなくなりますます混乱した。そんな時に思忘が

突然壁に向かって「うつせえ！　じじい！　今立て込み

中なんだよ！　あんたが話すと話が混がらがるから話

しかけんな！」と叫んでいた。そう言った後にすぐ壁の

方から「おお怖い、怖い。これは退散した方がよさそう

じゃな」という声が聞こえてきた。ぎよっとして、もう

一度声が聞こえてきた方を見ると、まるで人の顔の

ようになっている壁から声が聞こえてきて、僕はもう一

度気を失った。

次に自分の目が覚めた時には、二人が言い争っているような声が聞こえてきていた

「だから、お前は毎回単刀直入に言い過ぎなんじゃよ

……。それでいったいこれまで何人の客が気を失ってき

たことか……」

「うつせえんだよ！　じじい！　仕方ねえだろ！　こ

いつが疑問に思ったことを簡単に説明してやったのに
何故か倒れやがったんだから……」

「前から思ってたんだが、お前も少しは客に合わせたら
どうだ。それとそのじじいって呼び方をやめろ！ わし
はまだ他の建物と比べてここに二百六十年くらいしか
建っていないんじゃない！ まだわしは若いんじゃない！」

「いや、人間なんて六十歳以上は全員立派な老人だぜ。
あんたなんて二百六十年くらい建ってたんじゃないねえ
か！ あんた達の基準で考えるなよ！ それとおれっ
ちも言わせてもらうけどなア……、家の中にあんたの趣
味ののぼり旗なんか立てんなよ！ 邪魔なんだよ！」

「なんじゃと！ そんなこといったらお前のバイクと
特攻服も趣味が悪いんじゃない！ 何でどっちも夜露死苦
とか喧嘩上等とか書いてあるんじゃない！」

「……！ 別にいいだろう！ かつこいいじゃねえか！」
なんていう喧嘩話を聞きながら、僕はさっきから気
になっていたことがあったので聞いてみることにした。

「あのお〜」

「何だ！ ガキ！」「何じゃ！ 坊主！」

「ひっ！ すみません。質問なんですけど、何で壁が喋
ってるんですか？」

「ん？ ああ、そりゃあ、この壁、いや、このじじいと
いうか建物全体が付喪神だからな。そういうことで建物
に魂が宿っていて喋れるんだよ。まあそんな感じに思っ
てくれてればいい」

「付喪神!？」

「そういうことじゃ。まっ、よろしく、気軽におじいさ
んとでもよんでくれていいぞ」

「分かりました。それと……さっきの話って本当なんですか？」

「さっきの話？ ああ、お前が気絶する前に言ったおれっちがわすれ屋だって話？」

「それです！ 本当にですか？」

「本当だよ。何を隠そうおれっちこそが巷でうわさの“わすれ屋”の店主だぜ！」

「本当にあつたんだ……。けど、何で僕がここにたどり着けたんだろう？ たしかうわさの中では店主に気に入られないとだめだって聞いたはずだけど……？」

「んん？ ガキ、そのうわさは少し間違ってるぜ？ 何せ気に入られないといけない人物ってのはおれっちじやなくて、じじいの方なんだからな。まあ、今回は気に入るというよりは気になるほうだったらしいがな……」

「ええ！ そうだったんですか！」

「そういうことだ、坊主！」

「むう、すみません。ずっと気になるんですけど、ガキとか坊主とか呼ぶのはやめてもらえませんか？ 僕には忌部和守という名前があるんです！ ちゃんと呼んでください！」

「んん、そんなこと言つたつてなガキはガキなんだよ。今更変えられねえよ」

「むう、仕方ないですね。そうしたら、ガキのままでいいのでさっきの話の中で聞きたいことがあります」

「んん？ 何だ？」

「気に入るというよりは気になるほうだったってどういうことですか？」

「そのことならわしが答えよう。すまんが単刀直入に聞

くぞ？ 坊主、好きな人がいるらしいじゃねえか？」

「……！」

「好きなら何でさっさと告白しねえ？ もう後少しでこのままだと会えなくなるかもしれねえじゃねえか」

「……」

「なにい！ ガキ、お前好きな人がいるのか？ そういうことならすぐに告白したほうがいいぜ！ 後で悔やんでも、もう遅えつてこともあるんだから……」

「何なんですか！ 急に！ そんなこと言ったって怖いんですよ！ もし告白してみても、振られたらどうするんですか！ それに耐えられるほどの強靱な心なんて僕は持っていませんよ！ だから、早く記憶を消してください！ 告白してダメでダメージを負うより、あの子を好きだったこの記憶を消してもらおうほうが楽なんです

よ……」

「坊主それは本心か？」

「そりゃ、本心ですよ……」

「いや、だめだ、お前の記憶を消すことはできねえ」

「何でなんですか！ ここは自分が忘れたいと思う記憶を一つ忘れさせてくれる“わすれ屋”じゃないんですか！」

「さっきはつい言い忘れちまったが、そのうわさにはもう一つ間違つてるところがある。おれっちは何でもかんでも簡単に記憶を消せるわけじゃねえんだ。おれっちは客が本当に忘れたいと思う記憶しか消せねえんだよ」

「……！ そんなこと言ったって、無理なものは無理なんです！ 自分の弱さは自分自身がよくよく分かっているんですから……」

そう言つて僕は思わず飛び出してしまった。後ろから二人の呼び止める声が聞こえるが関係ない、自分に勇気が足りないことなんて自分が一番よく分かっているのだから……。

そんなことを思っていると道の反対側の方から人の叫び声が聞こえてきた。僕はその声を聞いて急いで声が聞こえた方に向かった。

現場に到着するとそこには先ほどの和風建築だった“わすれ屋”とは対照的に洋風建築で看板に“なくし屋”と書かれている建物があった。そして、さっきの叫び声は今もその建物の中から聞こえてきていた。僕は勢いよく扉を開けた。するとそこには制服を着た子の首を

絞めるように持ち上げた白いタキシードとズボン、シルクハット、ネクタイを身につけた優しい笑みを浮かべている白髪の老紳士がいた。

僕はその光景を見て思わず叫んだ。

「何してるんですか！」

僕の声聞いた老紳士はそれがさも当然かのように呟いた。

「うん？ 誰ですかあなたは？ 私はただこの子が暴れないように少し大人しくさせようとしているだけですよ？」

それを聞いた僕は先ほどより大きな声でもう一度叫んだ。

「その子から手を放せ！」

「Sigh, sir. 仕方がないですね。ですが、その子が変わるこ

とをしないように見張っててくださいよ？」

「ゲホオッ、ゲホオッ。忌部君!? どうしてここに!？」

「えっと、僕は偶然通りかかって……あの、その……」

「うん、いいよ。ありがとう忌部君、おかげで命びろ

いしたよ。命の恩人だね！」

「そんなとんでもない！ よかったよ、何とか大丈夫そ

うで。それより……おい！ そのお前！ 何でこの子

の首を絞めていたんだ！」

「何でかって？ 私はただこの子と契約した内容を実

行しようとしただけです。そしたらこの子が突然暴れだ

したので少し大人しくさせようとしただけですよ？」

「けどそんな乱暴することないだろ！ 待て、契約？

ということだ？」

「どうということも何も契約は契約ですよ。私と彼女が結

びました。内容はたしかこれを失くしてくれてことで
したね」

そう言った老紳士が手に掲げているものは、ハンカチ
だった。

「それは！ あの時の！」

——それは、前に夏の文化祭の打ち上げでプ
レゼント交換をする時に僕が選んだプレゼントだった。
その時は偶然そのプレゼントが彼女に渡って、嬉しい気
持ちになったものだ。あの時一瞬あの子がこちらを向い
て微笑んでくれた気がしたが、その時は気のせいだと思
っていた。それがまさかあの頃からずっと持っていてく
れたなんて……。

けど、なぜ？ 何で大事にしていたはずのハンカチを
あの子は失くそうとしてたんだ？ と僕が思っている

と前にいる老紳士がいつの間にか左手にハンカチ、右手に金属性の斧を持っていた。

ぎよっとする僕を尻目に老紳士は手慣れた手つきでハンカチを宙に投げ、そのハンカチに向かって斧を振り下ろそうとした。

しかし、次の瞬間僕の目に映ったのは切り裂かれたハンカチではなく、その前に手を広げて立つ彼女の姿だった。

老紳士は振り下ろすのを止めた斧を持って呟いた。

「Why? あなたがそれをかばうのですか? あなたはこれを失くしてくれるように私に頼んだのではないですか?」

「自分が一番よく分かっているの。叶わないかもしれない恋心を抱き続けるよりはそれを失くしてしまった方が

楽だって……。でも思い直したの、本当にこれでいいのかって……。このままこれを失くしてしまったら、きっと私は好きな人に思いすら伝えられない弱虫のまま生きていくことになるんじゃないかって……。だから決めたの! このままじゃだめだって! 私は今ここで自分の好きな想いくらい好きな人に伝えられる女になるって! だから私は今ここで告白する! 私は忌部君が好きだ!」

その言葉を聞いた僕は自分がどんなに勇気がなかったかを痛感した。そして、同時に今自分がすべきことがはっきりした。

「Non capisco cosa intendi. 一度結んだ契約はそう簡単に覆せるものではありません。私は職務をただ自分の責務を果たすのみです」

そう言った老紳士はもう一度斧を振りかぶり、今度はハンカチをかばう彼女に向かってそれを振り下ろそうとした。

しかし、斧は再度止まった。

その理由は僕があの子の前に乗り出して、かばったからだ。

「忌部君！ どうして！」

「Ich verstehe es wirklich nicht. 何故あなたが彼女をかばっているのですか？ あなたは彼女の何なのですか？ 後少しであなたは命を失うかもしれないからですよ！」

「そんなの僕がしたかったからに決まってるだろう！そして、言ってる、今はまだただのクラスメイトではないよ。けれども、これからは違う！ 彼女が勇気を

振り絞って告白したんだ！ なら僕もそれに見合うくらいに男にならなきゃいけないんだ！ 僕も好きだよ若さん！」

「¿Qué dices? No sé por qué. はあ、あなたたちのせいですっかり無駄な時間を使ってしまった。これで終わらせます。それではさようなら」

（今の僕に後悔はない。やりたいことをやったんだ！）
「僕は彼女をどんなことがあっても守る！」

そんな時だった。

「よく言った和守！」

そんな声がしたと思ったら、忘れもしない前と同じ乱暴な音が聞こえてきて、人が飛び降りてきた。

それは巨大な木製のハンマーを肩にかけている“わすれ屋”店主「思忘太郎」だった。

「おうおうおう、和守！ さっきまでとは違う男の顔つきになりやがって！ 見直したぜ！ 後はおれっちにまかせな！ なーに、このくそじじいとは少しばかり因縁があるんでな！」

「You are a forgetful man! Pourquoi êtes-vous là ?」

「くそじじい、少し落ち着けよ……。ほら、いつも通りに優しい笑みを浮かべてみるよ？ 今のあんた……。顔が強張ってるぜ？」

「!Maldita sea! Eso es un poco malo. いいでしょう、それで私に何を求めるのですかな？」

「簡単な話だぜ。その」「斧を仕舞え小童！ そうせんとわしも本気を出さねばいけなくなる……」

「……!？」

「……!? なるほど、そのお方もいるのですか……これ

は本当に分が悪い。仕方ありませんね。今回はそのお

方に免じて、特別に引き上げるとしましょう」

「そうしておけ、その方がおまえのためじゃ」

「それでは、皆さんまた逢う日まで。 See you!」

そう老紳士がいうといつの間にか姿が消え、建物も消えていた。

「ふう、何とかなったわい」

「おい、じじい！」

「何じゃ？」

「何じゃ？ じゃねえーんだよ！ 何俺のセリフを取ってんだよ！」

「仕方ないじゃろ、お前じゃ、あの小僧に一旦武器は捨てさせられても、引き揚げさせることはできなかったじやろうし」

「何だと！　じじい！　やるか！　今ここでおれっちの力を見せてやる！」

「おお、来い小僧！　軽く打ちのめしてやるぞ！」

「ちょっと待ってください！　あの思忘さん……。さっきおじいさんは建物に魂が宿っている付喪神って説明してくれましたよね？　けど今の姿はどうみても人魂にしか見えませんが……？　これはどういうことなんですか？」

「ん？　ああ、そういえば伝え忘れてたな。違うんだよ。じじいはな付喪神じゃなくて厳密に言うところツクモ神“なんだよ。”

「んん？　さっきと何も変わっていないじゃないですか、いったい何が違うんですか？」

「ん、ああそうか。口で言っても伝わらねえよな。ちょ

っと待ってろ、今紙に書いて説明してやる。えーっと、紙はどこに置いたっけな？」

数分後――

「あったあった。よし、それじゃあ説明してやる。まず、一般的にはつくもがみはこう漢字で付喪神って書くよな？」

「はい。そうです」

「普通はそうだよな。だが、じじいはそうじゃねえんだ。

じじいの場合はこちら“ツクモ神”と書くんだ」

「……？」

「だから何が違うんだって思うよな。まあ落ち着け今から話してやるから。そうだな、和守は八百万の神って知ってるか？」

「聞いたことがあります。確か……、自然界の物全てに

神様が宿っていると考えるのですよね」

「おお、それなら話が早くて助かる。簡単にいうとじじいの存在はその八百万の神と付喪神が混ざったようなものだ」

「……？ あ、すみません聞いてもよく分からなかったの、もう少し具体的に話してくれませんか？」

「はあ、まったくお前の何でもかんでも物事を率直に言う癖には困ったもんじゃのう。ちゃんと順序立てて言わんと分かるもんも分からんわ」

「くっ！ いつもはじじいの言うことは大抵あてにならない、そのまま聞くと面倒なことになるんだが……、今回は正論だから、仕方ねえ、しゃくだが大人しく従うか……」

「やかましいわ！」

そんな掛け合いが終わると、“わすれ屋”は話し始めた……。

「少し話が長くなるぞ？ これはじじいから聞いた話なんだけだよ。じじいは江戸時代のある有名な建物だったんだが、沢山の人々から長年愛されていたらしいんだよ。それだけだったらよくある話なんだが。ここからさつき話した八百万の神思想ってのが関わってくる。昔から日本では物には魂が宿っているって言われているだろ？ 昔の日本人はそのことを信じてたが、今では科学によってそれは迷信だって言われてしまった。そのせいで今ではそのことを信じるやつは中々いなくなっちゃった。だが、実は物に魂は宿ってるんだよ。人格はおぼろげだが、考えるたりすることはできる。ただし、人間のように喋ったり、動いたりすることはできねえけ

どな。

けれどな、じじいは違った。確かに最初の頃は今のよう
に喋ったり、動いたりすることはできなかった。しか
し、長年建つてたせい、時代の人々に愛されていたせ
いかは知らねえが、じじいの中で少しづつ人格ができて
いつていた。

だがな、どんなものにも終わりはある。昔は人気だっ
たじじいも時代の移り変わりとともにだんだん人気が
なくなっていった。それでもある程度の人気はあって、
他の建物のように打ち壊されずにすんでいたんだが…
…。運命の日というものはいつだつてある日突然訪れる
んだよな……。

その日もじじいはいつものように過ごしていたんだ
が、運命というものは残酷なもんだ。その日どこからか

火がついた。それからは早いもんさ、建物が古くて、金
がないのでまともな修繕もできなかったらしいからな。
火はどんどん燃え広がっていく間に建物は丸焼け
だ。普通だったなら、そこでどんな建物も終わりなんだが、
じじいはひと味もふた味も違っていた。他の建物より長
年建つてたせい、時代の人々に愛されていたせいかは
知らねえが、じじいの魂は消えなかった。建物が無くな
ってもなお生き残ったんだ。

それからのじじいはすごかった建物が燃えた恨みに
より付喪神のように妖怪に変化して悪さを働いたりも
したが、人々から受けた愛情により八百万の神のように
人助けもする変な存在になっちゃったんだよ。そして、
その後は色々あったらしく、結果高位の存在になり、
様々な能力も獲得して、今のようない感じになったらしい

んだがな。ほら、さつき人魂の姿になってただろ。それがその能力のうちの一つだな。その後も色々あって、あの時おれっちと出会ったんだが……。まあ、長くなるからこの話はまた今度な。とりあえず、おれがじじいから聞いた話はここまでだ」

「はあ、すごい話ですね。改めておじいさんのすごさが分かりました！ おじいさんはすごいんですね！」

「その通り！ ふふん、わしはすごいんじや。がつは

つは！ 何ならもつと褒めてくれてもいいんじやよ？」

「まあ、こんなことをいうとすぐ調子に乗るからあまり言いたくなかったんだがな……」

「あはは、なるほど。それとあの〜？ これどうしまし
ようか？」

「何だ？」「何じゃ？」

そこには先ほどの一連の流れの中で気絶している彼女がいた。

「ああ、これはすっかり気絶してしまつてやがるな……。おい！ 和守！ お前彼女を一旦おれんちまで運んでやれ！」

「おれんちというと……？」「バカ！ 和風建築のおれ
ちの建物までだよ！ お前その子の彼氏になつたんだろ？ 見てたぜ。それじゃあ、そんぐらいやつてやら
ねえとな！」

「あつ」

僕はあの時その場の勢いで彼女に告白したことを思い出し、急に恥ずかしさで頭が熱くなりまた気絶してしまつた。

次に目を覚ました時に見たのはまた“わすれ屋”が

僕に対して睨みつけている光景だった。

そんな光景とは裏腹に思忘さんは僕に優しく呼びかけてきた。

「おっ！ 起きたか、どこか体の調子が悪くなっているか？ 大丈夫か？」

「あはは、もしかしてまた僕気を失ってました？」

「そうだな、またお前気絶してたぞ。それにしてもお前よく気絶するなあ。本当に大丈夫か？ 毎日の栄養が足りてねえんじゃないのか？」

「そんなことより彼女は大丈夫なんですか！ どこかケガしてませんか！」

「おうおう、落ち着け落ち着け。大丈夫だ。どこもケガしてねえ。」「良かった無事で……」

「良かったな、まあ、それよりも……おい、和守お前何

でこのわすれ屋にたどり着けた？」

「え!? ……何でって前に思忘さんが説明してくれたじゃないですか。そのえっと、付喪神のおじいさんが気になる人物だったからって」

「あゝ、確かにそれも大事な条件なんだが、実はここに入るための条件がもう一つあるんだが……」

「えっ！ それはどんな条件なんですか？ 教えてください
ださいよ」

「それはな…… “本当に忘れたと思うっている記憶”
を持つてることだ。そうじゃないとおれっちもせっかく
来てくれた客の記憶を好き勝手に消しちまったら大変
なことになるからな」

「まあ、そりやそうですね。しかし、どうやってそれを見分けるんですか？」

「それはさっき説明したじじいの能力を使って見分けるんだよ」

「はあ、本当におじいさんは何でもできるんですね。けどちょっと待ってください。よくよく考えてみたらそれはおかしくないですか？さっき思忘さんは客が本当に忘れたと思う記憶しか消せないって言ってましたよね？」

「ああ、そうだが」

「僕が本当に忘れたと思っていた記憶は、思忘さんとおじいさんがそれは本心じゃないって見破ってくれたじゃないですか！それだと話が食い違うことになりませんが……」

「そうなんだよ。おれっちもそこが気になってるんだよなあ」

「それについては、わしに少し心当たりがある」

「うお！何だよじじい何か知ってんのか？」

「うむ。実は小僧が挙げた条件以外にも例外的に適用される条件が何個あるのじゃ。一つは、不思議なものとか何か関係を持つ人物であることじゃが……」

「不思議なもの？うーん、僕に思い当たる節はありませんけど……」

「まあ、たまに人間が迷い込んでくることもあるから一概には言えないんじゃないかな……」

「うーん、まあ分からないことを延々と考えても埒が明かねえ。とりあえず一旦それは保留にしておいて。今は一番やるべきことがあるだろ。おい、和守お前彼女を連れてここから出ろ。ここにいとまた必ずくそじじいが襲ってくる」

「えっ！　けどさっきあの『なくし屋』の人は退散したじゃないですか！　それにおじいさんがいるからあの人もそう簡単には手を出してこないんじゃないですか？」

「あいつはそんなに甘くわねえ。さっきはじじいの助けもあって何とか切り抜けたが、次はそうはいかねえ。あいつが本気でその子を奪おうとしたら今度はお前らを無事に守れるかどうか分かんねえからな」

「……！」

その時僕は思い知った……。

これ以上ここにいっても迷惑しかかけないことを……。

「分かりました。けどどうやったらここから出れるんですか？」

「それは俺が何とかしてやる。だからお前は彼女の手を

握っておいてやれ。彼女の体震えてるぞ？」

はっとして彼女を見てみると、確かに体が震えていた。

「分かりました。けど思忘さん大丈夫ですか？　もしあの『なくし屋』の老紳士が襲ってきたらあなたもただではすまないじゃないですか！」

「へっ、大丈夫だ！　そこらのガキに心配されるほどおれっちはヤワじゃねえよ。さあ、おれっちたちのことは構わずにさあ早く行け！　玄関の扉を開ければ戻れるようにしておいた！」

「でも……」

「でも、じゃねえ！　大丈夫だ！　おれっちは負けねえよ」

『わすれ屋』はそう言って、僕の前で屈託のない笑顔を浮かべていた。

僕はその言葉を聞いて確信した。『わすれ屋』はその見た目の恰好と粗暴な言動や行動により、初めて会った時にはつい怖い人のイメージを持ってしまうが、僕のことと心配してくれたりたりして、不器用だが本当は誰よりも思いやりの心を持っていることを……。

「分かりました。けど思忘さん死なないでくださいね。まだまだ話したいことがあるんですから！」

「おう！ 任せとけ！ 大丈夫だ！ あのくそじじいには負けやしねえよ！」

「それと……またきつと会えますよね！」

「ああ！ 当たり前だろ！ 次に会ったときはもつと『わすれ屋』のことを教えてやるよ（笑）ほらさっさと彼女を背負って行け！ 敵は待つてはくれないぞ」

僕は決心してドアノブに手をかけた。後ろからけたた

ましいい音が聞こえてきたが、僕は『わすれ屋』とまた会えることを祈って、ドアを開けて彼女を背負いながら後ろを振り向かず突き進んだ。

ドアを抜けるとそこはいつもの見慣れた空き地だった……。

その光景を見て今までのことは夢だったのかと思っ
てしまったが、隣に彼女がいて、その手にあの時のハン
カチが握られているのを見つけると僕はあの体験が現
実であったことを痛感した。

そんなことを考えていると、彼女が目覚めた。

「うーん、あれここは？」

「ここはいつもの空き地だよ」

「あれ？ 確か私はさっきまで洋風建築の家にいたは

ずじゃ？」

そう聞かれたので僕は彼女に一部始終を語った。

「なるほど。そんなことになってたんだね。まだ記憶の整理が追い付いていないところもあるけど、一つ確かなことがあるんだ。それはね……、あの時君が私を助けてくれたことだよ。だから忌部君ありがとう私を助けてくれて」

それを聞いて僕の中に嬉しいような恥ずかしいような今まで経験したことがない気持ちが生まれてきていた。

「それとね、もう一つ覚えてるんだ。それはね、忌部君が守ってくれた時に言ってくれた告白」

「告白？ あっ！」

「私あれを聞いて嬉しかったんだよ。いつもは弱虫の君

が勇気を振り絞って私の思いに答えてくれたから。だから改めてもう一度言い直すね。忌部君、私は君のことが好きです。大切な人になってくれませんか？」

僕は少し迷ったが、もう自分の中で答えは出ていた。

「もちろん、喜んで。若さん、僕も君のことが好きだよ」

「良かった。それじゃあ一つお願いがあるんだけど聞いてくれない？」

「何だい？」

「私にキスしてほしいの。もちろん……唇に」

「えっ！」

それを聞いた僕は一瞬困惑したが、前に彼女に言った宣言を思い出し、腹をくくった。

「それじゃあ、いくよ」

「うん、きて」

「……（ドクドクドク）」

「……（ドクドクドク）」

（お母さん、今僕は男になります。行くぞっ！）

「ん？ 二人で何やってんだ？」

「!? 思忘さん！ どうしてここに！」

「うん？ あのくそじじいとこのドンパチがさつき終わってな。お前らが無事に帰れてるか心配で様子を見に来てやったんだよ。そしたら、お前らが並んで座ってるのを後ろから見つけてな。気になったから声かけてみたんだよ」

「はあ、そういうことですか」

「忌部君、もしかしてこの人が話の中にでてきた“わすれ屋”の思忘さん？」

「そうだよ。この人がその思忘さん」

「そうなんだね。今回はありがとうございます。私たちを助けてくれて」

「よせやい。照れるじゃねえか。おれっちはあんた達の漢気に惚れたから、力を貸したんだ。礼なんていらねえよ」

そう言った“わすれ屋”は心なしか嬉しそうだった。

「そうだ、付喪神のおじいさんはどうしたんですか？」

「ああ、じじいなら今はおれんちに戻って休んでるよ。」

今回の戦いで流石に体がこたえたらしいからな」

「そうなんですか。そうしましたら、おじいさんにもよろしく伝えておいてくれませんか？ お世話になったので」

「おう、伝えておくれ。それじゃあ、無事に帰れたようだし、おれっちも流石に体がきついし帰るぜ。あつ、約

束してた“わすれ屋”の話教えるってのはまた今度

れはまた次の機会に話すとしよう……。

な！ おれっちもお前を気に入ったし、また遊びに来る

ぜ！ またな〜」

そう言つて“わすれ屋”は帰つていった。

そしてそこには二人だけが取り残された。

「ねえ、忌部君。まるで嵐のような人だったね」

「うん、そうだね」

「それじゃあ、二人だけになったことだし、さっきの続きしようか？」

そう言つた彼女と初めてのキスをしてその日はお互い家に帰った。

それが“わすれ屋”と初めて出会つた日のできごとだった。これからこのことをきっかけにして僕は様々な摩訶不思議な体験に巻き込まれることになるのだが、そ